と成れる等此の版の特徴なり。

已上建暦版の出版は事實なるべきも、其の現存せるや否やは大に今後の捜索に待つより外なかるべし、建長版の零本なることは最近の發見にして、木活版の零本と共に蓮門の書史學上大に惜むべき事なるを以て、此の三版の完本を發見することは大に宗史宗學に志す者の任務と考へ、尠か三版に就き愚見を陳べ、前々號の缺を補ふ事となせり。

讃頌哲學（承前）

——（ウイリアム氏印度教第二章）——

前田聽瑞

三種現體　吠陀固有の註釋は屢々三十三神に說き及んでゐるし、梨倶吠陀（一、三四、一一及び一、四五、二）も亦たこの數字を掲げてゐるといふことは注意せねばならない。この數字は印度の宗教的體系の中に常に出てくる聖數卽ち三の倍數である。

（原著者註）聖數三の例は澤山ある。卽ち三吠陀、三解脫法（Margas）三德（Gunas）重要なる三階級（Caste）濕婆（Siva）の額にある三眼、人生の三目的、三界等がそれである。

三種現體(Tri-muti 三身)は吠陀の讃歌中には頌されてゐないけれども、吠陀は確かにこの三身の源泉である。そしてこれがその後印度神話の中に於いて非常に明瞭なる形を採つて現はれたといふことは敢へて不自然ではない。吠陀の詩人があらゆる自然力を三部門に類集する傾向を持つてゐたことも知れ切つた話だし、又神の數が三十三體あるといふ斷定もツマリ重なる三身の各々が十一の變態をなし得るといふことを勘定に入れての話であるといふことは少くとも明瞭である。印度神話中の神名の變化は必ずしも新神の創造を意味しないといふことは疑ひを容れない。因陀羅、ヴーユ(Vayu)マルッ(Maruts)及びルドラ(Rudra)は何づれも相互の全相であり、變化であるらしく、從つてこれ等は後世の神話學に於いては種々の違つた名前を取つたが、遂に一人格神濕婆の下に包括された。これと同じく蘇利耶(Surya)卽ち太陽も亦たアーディトヤ(Aditya 阿迭多)を初めとして種々の名前を持つてゐる。そして、其名前の一つである梨俱吠陀の毘紐筱(Vishnu)といふのが三種現體の第二身となつてゐる。ところが茲處に等しく梨俱吠陀に於いて「犧牲の父」と呼ばれ、又それ自身三種現體の本質を具備してゐると云はれ、且つ屢々その崇拜者に依つて至上の神格と同一視された人生の大發育者たる熱火卽ち阿耆尼(Agni)がある。この阿

耆尼は容易に三種現體の第一身卽ち梵天(Brahma)に移つてゆくし、又梵天の崇拜が濕婆のそれに一歩を讓つた時には濕婆神へ容易に鞍替へをするのである。

創造の神秘を語る無有歌　次に掲ぐるところのものは梨倶吠陀の一部を意釋したものである。【ルザック會社發行の自著「印度の知識」(Indian Wisdom)參照】卽ち梨倶吠陀十卷(mandala)百二十九の讃歌は次の如く創造の神秘を語つてゐる。

一、未だ初めよりして有(Sat)と無(Asat)とあらざりしなり。空と天と亦之を蔽ふなかりき。動くものは是れ何ぞ。又何處にか。之を御するものは抑も何物ぞ。綠水深淵亦た何處にか之を求むべき。

二、未だ初めよりして死と不死(Amrta)とあらざりしなり。日と夜と亦別つなし。唯一ありて餘物亦存することなし。其呼吸するや風なく自動による。

三、初めは唯暗々を蔽ひ宇宙限界なく、一に是れ水たり。曠原唯空の繞るところ、熱(Tapas)力によりて彼獨り生ず。

四、此に欲(Kama)ありて生ず。是れ思惟(Mānas)の原種たり。聖者は之を心(Hrid)に思惟し、以て有無の連鎖を求む。(松本博士譯)

私共は此讃歌に於いて造物主が女性的原理の働きに依つて宇宙を創造せんとし

た注目すべき思想の最初の輪廓を微かに認め得る。そして、この種の思想は其後天地結婚説の中に於いてモット確かな形を採つた。又これと同じ思想は後章に説かんとする數論(Sānkhya)哲學の中にその特性が規定されてある。それで後世神話の中に顯はれてくる總べての主要なる神々はそれ〴〵その配偶者を持つて居り、そしてその配偶者も男神と同樣に尊敬を拂はれ、時には男神以上に多くの敬意を拂はれてゐるやうな女性を配偶者にした位、この種の思想は後世大勢力を集め得たことである。

梨倶吠陀では此思想は未だ充分發達の域に達してゐなかつた。そのことはアディティ(Aditi)ウシャス(Ushas)プリティヴィー(Prithivī)を除いては多くの女神はすべて無意義なものだとせられた事實に依つて證明せられる。主要なる神々の妻例へばインドラニー(Indrānī)アグナイー(Agnāyī)アシュヴィニー(Aśvinī)ヴルナニー(Varuṇānī)等の如きはその夫たる神と相並んで崇拜の對象とは見做されなかつた。ラクシュミー(Lakshmi吉祥天女)やサラスヴァティー(Sarasvātī妙音樂天辯財天)さへも名のみで崇拜されてはゐなかつたのである。

(原著者註) 百道梵書(Śatapatha-brāhmaṇa. XIV. 4. 2. 1)やブリハドアーラヌヤカ奥義書(Bṛihad-āraṇyaka Upanishad, III. 1.)

にはこの思想が非常に詳しく説明されてゐる。卽ち次の詩がそれである。「彼は獨りでゐることが愉快ではなかつた。彼は相手が慾しいと願つた。彼は身自らを二分して、かくして夫婦となつた。彼は彼の女に接近した。かうして人間が作られた。」

金胎の歌　次に梨倶吠陀第十卷百二十一節の讚歌を引用する。これは上揭のものと同樣に印度人の原始的信仰が唯一神的(Monotheistic)であつたといふことを主張する論客には都合のよい論據を提供するものである。

一、初めは金胎(Hiranyagarbha)ありて現す。是れ一切所生の主、天を維ぎ地を支ふ。是れ吾の以て犧牲を供するところか。而かも是れ將た何等の神ぞ。

二、吾に與ふるに命と力とを以てし、其の命(Prasis)は諸神の遵守するところ、其の蔭は死と不死となり。是れ吾の以て犧牲を供するところか。而も是れ將た何等の神ぞ。

三、苟くも呼吸し、苟くも眼睛を轉ずるものは一切剛力を以て之が主となり、二足と四足との動物を制するものは、是れ吾の以て犧牲を供するところか。而も是れ將た何等の神ぞ。

四、劫水圈宇に流れ、以て芽を生じ、以て火を發し、此に「一」は現出し、諸神の生氣となる。是れ吾の以て犧牲を供するところか。而も是れ將た何等の神ぞ。

五、その威神力は大水が力(Daksa=胎)を與へ祭り(Yajna=光)を生じつゝあるを凝視せり。諸神の上に位するこの唯一神は是れ吾の以て犧牲を供するところか。而も是れ將た何等の神ぞ。(松本博士譯參照)

婆樓那の歌　次に婆樓那(Varuna)並びに吠陀の三神卽ち因陀羅(Indra)と阿耆尼(Agni)と蘇利耶(Sūrya)とに捧げた詩の一節を茲處に引用して置く。

一、嗚呼、偉大なる婆樓那よ、その座は天上遠く隔つとも、この世界の支配者として一切事を洞見すること宛然掌を指すに似たり。人その非行を隱蔽せんとするも彼これを知らざるところなし。

二、凡そ立てる者、行く者、彷徨ふ者、歸る者、洞穴に潛む者、將た又二人相坐して語らんも第三者――婆樓那大王の悉知せざるところなし。

三、彼はその使者を此世に送つて絕えず人界に往來せしめ、その千眼を以て天地間一切の事物を檢査せしむ。實にや大王婆樓那の知らざるところなし。

四、彼は一切人の瞬(まばたき)の數すら算し居れり。彼が宇宙一切を驅使するは猶ほ賭博師の賽を弄ぶが如し。

因陀羅の歌

一、嗚呼、火神の雙生兒たる因陀羅よ、卿が生れし時卿が母なるアディティー（Aditi）はその強兒たる卿に生命の源泉たる蘇摩酒の一滴を與へ、以て卿が身に不滅の勇氣を附與したり。

二、卿は吾等の守護者たり、擁護者たり、將た亦た吾等の朋友たり。否な父母兄弟——これ等を渾然一たらしめしものたり。父の中なる父よ。吾等は卿のものにして卿は又吾等のものたり。

三、噫、慈悲の主よ、吾等が鄕を讃歎するの時、希くば吾等に哀憐を垂れ給へ。一罪將た多罪のために吾等を滅ぼし給はざらんことを。今日も明日も乃至永劫に吾等を救濟し給へ。

四、惡魔（ヴリトラ、Vritra 隱蔽者）あつて卿が大力に抗し、以てその水玉を奪取せんとするも、そは到底力の及ばざるところたり。卿が殷々たる雷鳴の下に大地は振蕩し、敵手は斃れ、その町は破壞され、その軍隊は蹂躙され、その要塞は粉碎さる。この時久しく堰き止められたる水は滔々として大地に流出せん。河水はために溢れ、泡沫濺々として、雷神の凱歌を奏しつゝ、おのがじゞ大洋の懷に注ぐ。

阿耆尼の歌

一、嗚呼、阿耆尼よ、卿は聖人たり、祭主たり、王者たり、保護者たり、將た犧牲の父たり。卿は吾等人類の委托を容れて常に使者を天界に送つて、吾等の讃歌と供物との運搬に任せり。たとひ、卿の祖先が空氣たり、水たり將た亦た不可思議なるアラニ(Arani)たらんも、卿自身は既に全能の神たり、主たり。生命と不死との授與者たり。

二、卿が本質は一たれども、人これを三樣に見る。卽ち卿が久遠の三身を地上にあつては火とし、空界にあつては電光とし、天にありては、これを太陽として開示せり。卿はすべての家庭を哺育する賓客たり。父、兄弟、子供、友人、恩人、等すべてのものに惠まれたる賓客たり。

三、噫、全智全能の主よ。卿の崇拜者たる吾等を救へ。吾等の犯せし罪より吾等を淸めよ。死して火葬場に橫はれる吾等の肉體をやさしく振舞へ。而して吾等の肉體を吾等が罪業の重荷と共に燒失せよ。さはれ、吾等が永遠の部分は光明赫々たる所、福樂窮みなき所に拉せよ。吾等をその所に拉し、吾等をして永劫にその國の聖者と共に住ましめよ。

蘇利耶の歌

一、吾等が全智の大神と思惟せる太陽を高く導く傳令使にも似たる曉光を見よ。無

數の星辰夜と共に盗人の如く去るや、その光は赫々たる火焔の如く輝きて四民を照さん。

二、明らかに見そなはす日の神なる金髪の蘇利耶は七頭の紅き牝馬に牽かせたる車に乗じ、その七人の愛嬢たる駿馬と共に堂々と車を上進せん。吾等も亦この低き陰鬱境を脱して煌々たるその天界に上らんことを希念す。吁、太陽よ。卿はげに神中の神たり。

原人の歌　更に私は梨倶吠陀の讃歌の中でも極めて新らしいものゝ一である有名な原人歌(Purusha-sūkta)から、その二三節(梨倶吠陀十卷九十節)を引いて置かう。これは印度の一神教(Monotheism)が段々と汎神教(Pantheism)へと移りゆく歴程と供犠思想の萠芽と、そして幾世紀の間も印度を束縛した階級制度とを説明するに役立つことである。

(原著者註)　此聖歌は比較的後世の産物だと一般に認められてゐる。そして、これは四姓の區別を取扱つてゐる梨倶吠陀中の唯一の讃歌である。

一、千手、千眼千足のプルシャ(Purusha)は、八面大地を蔽ふて十指尚ほ其の外に出づ。

二、プルシャは過去將來に生存し、將た生存すべき一切を包藏す。彼亦た不死界の主

にして(供)物によりて増長す。

三、プルシャの大は以て之を見るべし。而も彼の大は更らに之より大なるものあり。一切被造のものは、正さに彼が四の一、天上不死の界は唯是れ彼が四の三に居る。

四、彼其の四の三を以て上天し、其の四の一は此に止まりて、以て其の食を供するところと供せざるところと、八方其身を分つ。

五、ヴィラージュ(Virāj主或は女主)は彼の生ずるところ、而してプルシャは亦彼の生ずるところたり。彼の生ずるや宇宙に充つ。

六、供物の既に聚るや、プルシャは此に神前の酪を生じ、禽鳥と山林村落の生物を造る。

七、プルシャは其身を分ちて此等一切のものを生ず。プルシャの分身將た幾何ぞ。其の口、其の腕、乃至其の脛足は果して何物をか生ぜる。

八、婆羅門は是れ彼が口、王種は是れ彼が腕、賈人は是れ彼が脛、奴隷は是れ彼が足の成すところたり。(松本博士譯)

吠陀聖典に對する二三の考察　論を結ぶに當つて、一言注意して置きたいことは、上掲の例證丈けでは吠陀讃歌の價値を評價するに當つて非常な誤解を來たすだらうといふことである。

由來、印度人の多數は吠陀の數々の集錄、殊に梨俱吠陀の集錄なるものは、すべて善良なもの、偉大なもの、神聖なものが含まれてゐるのだと信じては居るが、全體としてこれを通覽すると顯著なる思想、高遠なる概念が含まれてゐるといふよりも寧ろ幼稚な考へが澤山含まれてゐることを氣付かずには居られない。更に又吠陀の內容が充分知られなかつたがために、一時は吠陀をば供犧や迷信や輿論の一權威だと考へては居たが、今はこれを認むべくもない。そして吠陀の讚歌は後世に於ける印度宗教體系に於ける著しき一信條たる靈魂輪廻の教說には少しも觸れてゐない。尙ほ又寡婦結婚の禁止、幼兒結婚の奬勵、四姓の鐵案さては外國旅行の禁止に對しても吠陀の讚歌は何等指示するところがない。又その讚歌の中には自然力の人格化が木や石から刻まれた像によつて表現されたといふ例も更にない。從つて吠陀時代には一個の偶像もなければ、これを祀るべき一個の寺院もなかつたことは、まづ確實だと見て差支ない。

吠陀時代の社會相　當時の社會狀態は決して低級なものではなく、又その文明も或る程度まで到達してゐたといふことは讚歌の中に散見する種々の引喩から推量され得る。新らしく移住して來た印度アーリヤ民族の財源が主として牛馬羊等

の禽獸にあつたことは明らかである。彼等が農業の原理を理解し、又町や防禦工事場を建設することも出來、更に種々の藝術や科學、さては金物細工に關する知識をも幾分持つてゐたことも明瞭である。更に又彼等が哲學的思索に耽つたこと、統治者を持つてゐたこと、ハツキリとした階級制度は未だ出來てゐなかつたにしても、とも角彼等の間に幾つかの階級があつたといふこと、一夫一婦（Monogamy）が規定ではあつたが、一夫多妻が行はれてゐたといふこと、供犧のために動物を殺したといふこと、彼等の間には動物の肉を喰ふ習慣があつて牛の肉さへ辭せなかつたといふこと、賭博を好み酒類に耽溺してゐたといふことなどは、いづれも明瞭な話である。

（私註）印度人が牛を靈獸として崇拜し尊重することの熱心さと眞劍さとは實に私共の想像以上である。昔の印度では牛は人間に乳と肉とを與へて人々の生命の發育を助けたばかりでなく、牛乳牛酪は又神前の供物として必要缺くべからざるものであつた。そして牛が農民としての印度人に必要であつたといふことは、茲に贅言するまでもない。從つて古代の印度人が牛を尊重したことは豫想外で、牛は實に彼等が財産中の財産であつた。牛のためには野蠻人との戰爭さへも辭せなかつた程である。昔「戰爭」なる言葉がガヴイステイ（Gavisti）即ち「牛の欲求」といふ文字も表現されてゐたといふ史實から考へても古代の印度人が牛を尊重した程度が大低理解されやうと思ふ。爾來牛への尊敬は段々大袈裟となつて牛は遂に宇宙の大本だと考へられ時には直言を誦しつゝ牝牛の乳房より乳を搾る行者さへ出來たことである。印度の牛に就いて尙ほ云ふべき澤山の材料を持つてゐるが、何分「私註」のことだからこれ位にして置く。

尙ほ終りに一言附け加へて置きたいことがある。それはかのイスラエル(Israel)の子孫がさきにヒチット人(Hittites)やペリチット人(Perizzites)やフィリスチン人(Philistines)の住んでゐた土地を發見したと同じやうに、遊牧のアーリヤ人種も亦彼等が印度に侵入して來た時にはシシアン人(Scythian)や土蕃民族——彼等はダスユー(Dasyus)アナールヤ(Anāryas)ニシャーダ(Nishādas)或はドラービダ(Drāvidas)と種々に呼ばれてゐる。そして彼等は長い間印度の太陽に晒らされたためか或は恐らくモット原始的な黑面土蕃の民族と結婚したためか、彼等の顏色は殆んどアフリカ人のやうに黑くなつてゐる。——の持つてゐた土地を發見したといふことである。(完)

讀佛教各宗より見たる太子の信仰

石井教道

ベーコン曾て四種偶像の打破を叫むだその中に、劇場の偶像なるものを數へた。古人の傳說や一般の流行に一種の權威を認め、之が是非曲直を究めずして無批判に盲從する人心の傾向を指したのである。恁うした心理が吾人を知らず〳〵に導い